青玉

夕波　ちどり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青玉

【Ｎコード】
Ｎ４４９９Ｗ

【作者名】
夕波　ちどり

【あらすじ】
ティア・ラピス・ファレント。
優秀な魔法使いであり、その力故、幼いながらも一族の当主をつとめる彼女。人々からは天才とも、化け物とも呼ばれるが、余り気にしない。
そんな彼女が唯一望むもの。それを叶えるため、彼女は今日も日々を過ごす。

序章

トランプのスペードのような形をしたこの島国。
この島国には３つの大きな権力が存在する。
まずは、この島国のすべてを統べる国であるトルセニア。
そして、トルセニアの国土内にありながら、同等の権力をかざす魔技術連盟・エルム。主に道具を介し、魔法を使う者たちで形成された組織だ。
さらに、この２つの権力と肩を並べる３つ目の権力。道具を介さず、直接的に魔法を使う、つまり魔力持ちの者たちの組織。４つの血族により取仕切られるシークスと呼ばれる魔術ギルドだ。４つの血族はトルセニアの東西南北、それぞれに拠点をおいている。
それぞれが領土を持ち、そこに町を開き、魔法を生業とする者たちが彼らに仕えている。
東に、ファレント。
西に、ガルディ。
南に、ホーラウス。
北に、セリアム。
その東の一族。
頂点に君臨するのは、齢僅か十六歳の少女。
ティア・ラピス・ファレント。
天才とも、化け物とも呼ばれる一人の女の子。

01

各一族には様々な特色がある。
北は魔物を使役する力を持ち、南は神の声をきき従い、西は精霊と言葉を交わせる。
そして、東といえば魔物の王、所謂、魔王と呼ばれるそれと人間との間に生まれた子の末裔とされていた。
その魔王の血を引く証とされるのが、赤い石。例外を除き、彼の一族のものは右手の甲に赤い石を宿し生まれてくる。その石は強い魔力を宿し、その石のお陰で彼らはシークスの中でもとりわけ強い力を持つ一族とされていた。
「まぁ、今となっては本当に魔王の末裔なのかどうか、その真相はわかりません。ですが、四族の中で最も力が強い一族であることは確かですね」
教壇に立つ教師が手に持っていて本から顔をあげる。
金髪はくるくると綺麗に巻かれ、深みのあるエメラルドの瞳は見るものを捕らえて離さない。白い肌にメリハリのある体つき。学園一の美人教師と名高い、アンジェリカ・カリーリは艶やかに微笑む。
彼女の笑顔に男女関係なく、生徒たちは頬を赤くし見惚れてしまう。
ここは東の一族が治める里、コキヒ。その里の中にある唯一の教育施設であるシアン。その高等部一年生の特進クラス。
今は、歴史の授業中。アンジェリカは更に話を進める。
「私たちはその東の一族、ファレントの直轄の里に住み、恩恵を与っているのです。それに報いることができるようよく学び、励みましょう」
そして、と彼女は続ける。
「御当主様の、ティア様のお力になれるように」
アンジェリカの視線は窓際の一番後ろの席に座る少女に注がれる。

そして、それにつられる様にクラス中の視線が少女に向けられた。
真剣に話を聞いていた少女はアンジェリカと目が合い、そして多くの視線が自分に注がれているのがわかった。しかし、特に動じることもなく、悠然とそれらを受けとめる。
黒と見間違うほどに深い鉄紺の長い髪。それと同じ色の瞳。
そして、何よりもその美しさ。アンジェリカのような、色気を感じさせる艶やかさではなく、何も穢れを知らないような、凛とした美貌。まだ幼さの抜け切ってない顔立ちではあるが、あと数年もすればそれもなくなるだろう。
この少女こそファレントの現代当主であるティア・ラピス・ファレント、その人であった。
先生、とティアの美しい声が教室に響く。
「どうぞ授業を続けてください」
にこりと、それは美しくティアは微笑んだ。

02

授業が終わり、教室を後にするアンジェリカ。
去り際に教室を見ると、騒がしい教室の中で一人ぽつんといるティア。普通ならば、そこまで目立つようなことでもないかもしれない。しかし、ティアの場合は違った。只そこに存在するだけで、どうしても彼女は良くも悪くも人目を引いてしまう。
しかし、そんなことは気にせず、自分の席から窓からずっと外を見つめていた。
それだけでも、不思議と絵になる彼女。それと同時に、この教室の中で彼女はひどく浮いた存在だった。
「困ったものねぇ、うちのお姫様にも」
誰に言うでもなく、アンジェリカはため息と共にそうこぼした。
そんなアンジェリカの心配などつゆ知らず、ティアは窓の外を見つめ続けていた。

03

ティアは授業と授業の合間の休憩時間になると、一人で過ごす。人と自分から関わっていくようなことは決してしなかった。

周りも幼くして当主になった彼女にどう接していいのか分からず敬遠していたため、自然とそうなっていったのだ。

しかし、そんな状況にティアは不満もなかったし、それでいいと思っていた。特に問題などない。

だから、何故こんなことを言われているのかティアには理解できなかった。

「もっとクラスメートと仲良くできないの？」

放課後に話があるとアンジェリカに呼ばれて、歴史学の準備室へ行くとため息混じりにそうなじられた。部屋に入るなり、いきなりだ。

ため息をつきたいのはこっちだと、ティアは心の中でぼやく。

「先生、そんなことで呼んだんですか？」

暇じゃない。と口には出さないが、遠まわしにそう告げる。そして、相手の返事も聞かず、踵を返し帰ろうとするが、それは叶わなかった。

今まさに出て行こうとした部屋の扉が、『パンッ』と高い音をたて勢いよく目の前で閉じたのだ。

アンジェリカの魔法だろう。

「ティア様！　ちゃんときいて下さい。アンジェは心配して言っているんですよ？」

まともにとり合おうとしないティアにアンジェリカは声を荒げた。思わず素で話してしまう程に。

学校では教師として接するように強く言われていたので、他の生徒と分け隔てない言葉遣い、態度をとっているのだ。

「……先生？」

「いいえ、ティア様。真剣に聞いてください」
素で話しはじめたことをたしなめる様に声をかけるが、それはまるで火に油を注ぐようで。アンジェリカは怯むことなく、ティアを見つめる。
そんなアンジェリカの様子をみて、ティアは諦める。ちゃんと話さないと帰してもらえなそうだと感じたから。
事実、先程勢いよく閉じた部屋の扉が開かない。ピクリとも動かない。まだ、アンジェリカの魔法が続いているようだ。
歴史学の準備室は普段からアンジェリカが使っている部屋。当然、地の利が彼女にあるわけで。
（破れない事はないけど、学校の備品を壊しかねないし）
ティアは肩をすくめ、アンジェリカの向かいのイスに腰をかける。
言いくるめて魔法を解除してもらったほうが、良いと判断したためだ。
「ねぇ、アンジェ。心配してくれるのは有難いけど、本当にこれでいいと思ってるの」
「どうしていいんですか！？　当主として、もっと里の者たちと関わるべきです。将来のためにも、信頼や忠誠を得るべきです」
熱く語り、更に言葉を続けようとするアンジェリカ。長くなりそうだなぁ、と判断したティアはすっと目を細め、片手をあげアンジェリカの言葉を遮った。
その気も無い話に時間を割く気はない。
「言いたいことは分かるけど、正直そこまで手がまわらないの。今は里の体勢を立て直すことが先決」
それ以上の言葉は認めないという雰囲気に、アンジェリカは何も言えなくなる。
自分の想いが伝わらなく、しかし、ティアのいうことも分かる。歯痒さから唇をかみ締める。
そんなアンジェリカの様子を見て、ティアは苦笑する。
「アンジェは本当に私のこと好きだねぇ」

先程の雰囲気から一転し、柔らかな視線を向けられ、アンジェリカはぱっと表情を明るくさせる。
「勿論です！　私の総てはティア様に捧げていますもの！」
「……ありがとう。でも、捧げるのは忠誠とかでいいかな」
「忠誠？　ふふっ、そんなものじゃあ生ぬるいですもの。それよりもっと、ねぇ？」
（ねぇ？　と同意を求められても困るんだけど）
熱っぽく語られ、ティアは僅かに顔を引きつらせた。気のせいで無ければ注がれる視線も妙に熱っぽい。
いつものことだが、いつも何かしらの危機感を煽られる。気のせいなのか、それともいつか慣れるのだろうか、と考えつつ、誤魔化すように、話の矛先をずらす。
「あと、そういう類のものは私個人じゃなくてファレントに捧げてくれるともっと有難いんだけどね」
「どうしてです？　同じようなものじゃないですか」
心底分からないという顔をする。アンジェリカにとって大差のないことでも、ティアにとっては天と地にも違うのだ。それらの所在が何処にあるかは。
「……私に何かあったとき、アンジェリカがそのまま里に仕えてくれないと困るでしょう」
「まぁ、ティア様に何かなんて起こりません。そんなこと起こる前に私が守りますから！」
ティアの手をガッと両手で握り締め、瞳を輝かせる。
そんな様子のアンジェリカを暫く見つめていたティアだが、急に笑い出した。何事かと、目を瞬かせるアンジェリカ。
「アンジェは信頼を得ろって言うけど、大丈夫だと思うのよ。だって、アンジェみたいに私を想ってくれる人はちゃんといるもの」
ティアは立ち上がると部屋を出て行こうとするが扉の前で振り返る。
「頼りにしてるから」

アンジェリカはその笑顔に見惚れ、頬を赤く染める。
「はい！」
その言葉に、強く頷きながら返事をする。アンジェリカは涙すら零れそうな想いだった。
ティアは続ける。
「で、部屋の扉開けてもらってもいい？」
困ったように笑いながら。

04

アンジェリカとの話も終わり家路につこうと学校から出ると、もう日が傾き始めていた。
赤く染まりつつある里の景色。
（ああ、綺麗だな）
一族の始まりとされる魔王と人間の子は、燃える様な、鮮血の様な鮮やかな赤い髪に瞳をしていたという。それ故、その象徴色は赤色とされ、この里にも赤色を象徴させる建築物が多かった。
赤く交じり合うその風景に、いつも心奪われる。
ただ、ここは違う。
ティアは今しがた出てきた建物を振り返る。
数年前に大々的に建て替えを行った、この教育機関であるシアンは青色が多く使われている。
現代当主であるティア自身の象徴色とされる青色が。
しかし、ティアが望んでそうした訳ではない。周りの意見に押し切られる形でそうなったのだ。ティアが行った施政故の建て替えだったため、彼女の象徴色にすべきだと。
赤い夕日に美しく馴染む町並みと違い、馴染むこともできず、所在無さげに佇む青いそれ。ティアには美しくなんて、とても見えなかった。
（なんて無様なんだろう）
息苦しさを感じ、また前を向き歩き出す。
そこで、ふと妙な周りの騒がしさに気が付いた。
ティアは一瞬何事かと眉を顰めたが、すぐに思い当たることがあり、ため息をついた。
昼間感じたあの気配。
ずっと、教室から外を見て確認していたが、やっぱりそうか。と納得する。

きっと、もうすぐ屋敷の人間が慌てて自分を迎えに来るだろうと、予想し校門へと足を速める。

けたたましい馬車の音が遠くから聞こえてきた。

05

案の定、校門に着くとすぐに屋敷からの迎えの馬車が到着し、慌しくそれに乗せられた。
屋敷に着くと、玄関にはティアの父親であるロード・ラピス・ファレントが、落ち着かない様子でその場を行ったりきたり。ティアが帰って来た事にも気付かないようで、何事かを呟いていた。
暫く、そんな父を目で追っていたが、いつまでたっても存在に気付いてもらえそうにないので、いい加減声をかけた。
「お父様、ただいま。そんなところで何してるんですか？」
ティアの声にロードは、足をぴたりと止めた。やっと、ティアが帰ってきたことに気が付いたらしい。
きらきらと輝く色素の薄い茶髪。その髪の合間からのぞく瞳は、赤色の瞳。優しく、頼りがいのある、しかも、見た目も良い。何処に出しても恥ずかしくない父親。なのだが、何せ娘のティアから見てもひくほどの子煩悩。
そんな父親の顔色が、限りなく青ざめておりティアは苦笑するしかなかった。
「……北の一族が。セリアムが、来ている」
今にも死にそうな声で、ロードは告げる。
（だと思った。まぁ、そうよね。もうすぐ私の十六歳の誕生日だし）
ティアは肩をすくめた。
もうじき来るだろうと、予想はしていたものの事前連絡なしで他の血族の領地に入って来るとは、随分なめた真似をしてくれる、と内心毒づく。
「ジアム様も来てるんですか？」
どうせ来ているに決まっていると思ったが、確認の為に聞いてみると、ロードは忌々しげに頷いた。
「それと、北の若者が十数人連れてこられている」

「え、そんなに？　さすがにそれは鬱陶しい」
数人は連れてきているだろうとは思っていたが、予想よりも多い人数に、さすがに驚いた。あまり、外部の人間を里に入れたくないのに、よくも無許可でその人数を連れてきたものだと、ティアは眉間に皺を寄せる。
「本当に、なめてるわねー。何考えてるんだか」
北の一族の当主。ジアム・ルド・セリアムの偉そうな、それでいて人を馬鹿にした様な顔を思い出して思わず呟く。
「あの顔、妙にイラッとくる」
「それに関しては同意する」
独り言のつもりだったし、誰のとは明言しなかったが、伝わったらしい。
「まぁ、必要ない人間は早いとこ追い出しましょう」
「……追い返すって、彼らが何のために来たのかわかっているだろう？」
「勿論分かっていますよ。お父様」
ティアは余裕で笑ってみせるが、ロードといえばそれとは対照的に最愛の娘のことを想い、顔を苦痛に歪ませていた。
ずっと昔にも父親のこんな顔見たことがあるな、と思う。ただ、それは誰にも言えない彼女の秘密のひとつ。
（ああ、ぞくぞくしちゃう。本当に私ってどうしようもないわ。人を不幸にする才能でもあるのかしら）
自嘲気味に笑うが、そんなことを考えている場合でもない。未だ青ざめた顔をしている父にも申し訳ないが、問題は早く片付けたい。
「北の方々は客間に？」
後ろに控えていたメイドに確認をとると、ティアは着替えることもなくそのまま客間に向かった。
後ろからロードの呼ぶ声が聞こえたが、振り返らず心の中でごめんなさい、とだけ謝る。ひどく心配をかけてしまっているのは分かっていた。

北の一族と東の一族は、昔から相性が悪い。犬猿の仲とでもいうべきか。
北は、魔の者を使役する。
東は、魔の者の血を引いている。
どうもそこに問題があるらしく、どちらの一族にも互いが互いを忌み嫌っている者が多いのだ。
とにかく、事あるごとに衝突をしていた。
そんな北の一族が、東の領地をわざわざ訪ねてきたのには、当然訳がある。
今から、十数年昔のこと。ティアが当主になり間もなかったとき。ティアと北の当主ジアムはある誓約を交わした。
その誓約のために彼らは来たのだ。
客間の前まで来たティアは、扉をノックする。
覚悟など、とうの昔にしたことだ。
今更思うところなどなかった。
そして、躊躇うことなく扉を開けた。

06

「失礼します。お待たせして申し訳ないです」
ティアは完璧な笑顔を浮かべ、部屋の中へと足を踏み入れた。謝罪の言葉など社交辞令だ。むしろ、了承もとらずに来たことを謝罪して欲しいくらいだ。
しかし、期待とはそうは簡単に叶わない。
「ああ。無断で来たのだから、気にするな」
偉そうに上からそう言われティアは思わず顔がひきつりそうになったが、なんとか堪えた。心の中で、ひたすらに我慢、我慢、と言い聞かせ、なんとか耐えた。
ティアの心の内など察していないのか、察する気もないのか。また偉そうに座っていたソファから立ち上がりこちらに歩みを向けてくる人物。
北の一族の現代当主、ジアム・ルド・セリアム。高い背に、筋肉質というわけではないが、男性らしい身体つき。そして、灰色の髪からのぞく黒い瞳は、好戦的で気の弱い人間なら目が合っただけで、動けなくなってしまいそう。随分威圧的な印象を受ける男だった。
そして、部屋の中には十数人の青年たち。ティアの美しさに頬赤く染める者もいれば、化け物とも呼ばれている彼女に怯えたような表情をする者、様々な視線がティアへ注がれる。
好意も悪意も向けられるのには慣れている。ティアはそれらに今更何を思うわけでもなく、ただこんな人数に居座られては邪魔だな、とだけ思った。
「お久しぶりですね」
ティアのその言葉にジアムは意地悪げににやりと笑う。
「そうだな。君は最近シークスの会議にも顔を出さない。一体いつ振りか」
「あら、私みたいな若輩者が出席しても場を混乱させるだけですか

ら。政治のことは父に一任してあります」
「謙遜しなくてもいいだろ。天才とも名高い君のことだ。君が出てくれればさぞ素晴らしい会議が出来るだろうに」
「そんな私如きが意見出来る様なことなんて。皆様の足を引っ張ってしまうだけです。ジアム様のような経験豊富な方には到底適いませんもの」
お互いにお互いを口先だけで褒め合いながら。ティアの目は据わり、ジアムは見下したかのような顔でそれは楽しそうに笑っていた。そして、お互いに目は決して逸らさない。
そんな二人の異様な空気に、青年たちは居心地悪そうに俯いていた。
いつまでも埒の明かない睨み合いを無駄だと判断したジアムは、そういえば、と話し出す。
「暫く見ないうちに随分綺麗になったな。もう幾つになった？」
ジアムが何を言っているのか、理解できず、ティアは目を瞬かせる。しかし、それも一瞬。すぐにその意図を理解たからだ。
ああ、嫌味か。と。
ただ、そんなことは顔に出さない。
「ふふっ、面白い事を仰るんですね。それだけの人数連れてきといてそれはないんじゃないですか？」
嫌味には嫌味で返してみる。
「まぁ、それもそうだな。十六歳の誕生日おめでとう」
まるで感情のこもってないおめでとう、に対し、ティアも形ばかりの礼を返した。
「では本題だ」
ジアムのそれは楽しげな声。
「誓約を果たしてもらおう、お姫様」
ジアムは自分の後ろにいる北の若者たちをちらりと見る。
「君の婚約者を決めてもらおうか」

07

――――――――――……。

『それは許可出来ない』
ジアムの冷たい声。
机に頬杖をつき、不快気に目を細める。
『東ばかりが得をするようで、承知しかねるな』
まだ幼い少女であったティアを容赦なく睨みつける。
しかし、ティアはその視線に怯むこともなく、聞き返す。
『どうしたら、納得して頂けますか？』
幼い少女の声が静まり返った部屋に響く。
怯えることもなく、真っ直ぐに答えを求めてきた少女。
ジアムは驚き目を見開き、少し考える素振りをすると口を開いた。
『そうだな。では、ひとつ誓約でも交わそうか、お姫様』
それは楽しげにジアムは笑った。

――――――――――……。

08

「私が相手決めていいんですよね」
誓約。
それは、ティア自身が北の者と婚約をするといいものだった。
それに至った経緯は様々だが、とにかく、東と北で血縁関係をつくるというのがこの誓約の意図。
ティアが１６歳になったとき、それを果たすということになっていた。
今時政略結婚というもの時代錯誤甚だしいと思うが、この誓約を交わすことで周りが納得するならそれも有りだと思った。
（お父様は婚約のこと気に病んでたけど、私は正直婚約するくらいなんとも思わないのよね。まぁ、それにしても……）
随分な人数を連れてきたものだと、内心ため息をつきながら北の若者たちをぐるりと見渡す。誰も彼もが緊張に表情を固くしていた。
「好きに選ぶといい。それ位の自由は君に」
ジアムがティアに書類の束を手渡した。中身を捲ってみると、北の若者たちの経歴などが書かれたものだった。
ぱらぱら、と中を流し見て、そこで、あることに気が付いた。
（ふぅん。随分な人選してくれてるわね）
相変わらず、なめられている気もするが、ただこの人選の意味をそのまま受けとってもいいのか判断しかねる所だ。相手の真意が掴めず、どう出たものかと、悩んでしまう。
「まぁ、ゆっくり悩むといい。決まるまではこちらに滞在させて貰っても構わないだろう？」
ジアムは先程座っていたソファに、再び身を沈め、出されたお茶に口をつける。どうせ、暫くは決まらないだろうと、確信しての言葉だったのだろう。
「そうですね。決まるまでは構わないですけど」

ティアは、一旦言葉をきると、手にしていた経歴書を閉じる。
（意図はどうあれ、私の期待に適う人でなければ駄目。相手の思惑まで図る必要はないか。なにより、長居なんてされたら困るし）
自分の中で結論に至り、すっと歩き出す。
自分にとって最も必要な人。悩むまでもない。適当な人物が、そこにいた。
北の若者のある一人の前で立ち止まる。
「こんにちは。お名前伺っても？」
黒い髪に黒い瞳。白い肌に細い身体つき。線が細く、穏やかそうな印象の青年。黒い瞳は揺らぐことなくティアを見つめていた。ただ、僅かに見開かれたその目は彼が驚いているということの現われなのだろう。
「……リト・クロム・セリアムです」
間をおきながらも、冷静な声でそう答えた青年。ティアは満足げに微笑むと、くるりとジアムへ振り返る。
「この人で」
「……は？」
ジアムの間の抜けの声がきけた。
そして、その声にぴったりな間の抜けた顔。
ティアは内心ほくそ笑む。
「だから、私この人と婚約します」
ジアムが目を大きく見開く。
「そういうわけで、お引取り願えます？」
堂々とそう言い放った。

09

「あー、いい気分だわ」
ジアムの顔を思い出しては、ティアはそれは楽しげに話す。
「きっと、私が困るような人たち連れてきたつもりだったんでしょうね。それなのに、すんなり決めちゃったもんだから」
そこまで喋るとティアは再び笑う。
さっさとセリアムの人間たちを追い帰し、執務室まで戻ってきたティアはロードに先程の事の顛末を話した。
執務机の椅子に体育座りするように膝を曲げ足を乗せて座り、椅子をクルクル回したり、膝におでこをつけ俯いて笑ったり、とにかく上機嫌だった。
ロードは久しく見ないほどの、ティアの上機嫌ぶりにため息をつく。
「ティア、君ねぇ……」
「性格悪い？　そんなことは百も承知です。でもね、お父様。それでも、嬉しくって仕方ないの」
「そういう話じゃなくて！　随分と簡単に決めてきたみたいだけど、君、何をしたかわかってる？　婚約者を決めたんだよ？　これから先の人生を共にする伴侶を」
「えー、やだー。なんかそういう言い方すると生々しいー」
「だから、そういうことを君は決めたんだ！」
ふざけて答えると、ティアの目の前の執務机を両手でと叩きつけ怒られた。
そうかと思えば今度は頭を抱えしゃがみ込む。なんでうちの可愛い娘が政略結婚なんてしなくちゃいけないんだ、と嘆きながら。
ティアは忙しそうだなぁ、としゃがみ込む父親を机越しに覗き込む。
「お父様がそんなに嘆くほど酷い人じゃないと思いますよ。彼、優

秀そうだし、優しそうだし」
（なにより、扱いやすそうだし）
そんなことを口にすれば、また怒られそうなので言いはしなかった。しかし、そんな気を使う必要もなかったようだ。
ティアの言葉さえも聞こえないほどに、落ち込んでいるロード。
「……それに、君が選んだ相手って」
経歴書を見ながら、ロードは渋い顔をする。そして、深い深いため息をつく。
あまりの落ち込みように少し申し訳ないような気になって、元気を出してもらおうと冗談交じりに言葉を返す。
「まだなにか問題でも？　顔も割とタイプだし良いと思ったんですけど」
「ああいう顔が好きなのか！？」
がばっと起き上がり、ティアに詰め寄るロード。
（え。思った以上に食いついてきた）
まさか、ここにそこまで食いついてくるとは思っていなかった。驚きつつも、なんだか面白そうだと思い更に話を広げてみる。
「色白黒髪良くないですか？　眼鏡も似合いそうだし。眼鏡萌え、みたいな？」
少し首を傾げかわいらしく、少し冗談っぽく言ってみる。
「……子どもの頃はお父様と結婚するって言ってくれてたのに。いまは、全然僕とタイプ違う人がいいんだ」
今度は顔を手で多い、さめざめと泣き出した。
元気を出してもらおうと思ってふざけてみたのに、完璧に逆効果だったようだ。しかも、完全に本気にされている。
（面白がって話し広げなきゃ良かった。ていうか、それいつ頃の話？）
そんなことを言った覚えはないし、相も変わらない、子煩悩な父に軽く眩暈を覚える。正直子離れして欲しいのだが。
「……まぁ、冗談ですから。本気で捉えないで下さい。本当に優秀

そうだから問題ないと思ったんです」
咳払いをして、気まずいのを誤魔化す。
本当に冗談だったのか、と疑いの目を向けられたが、下手に目を逸らすとまた泣かれそうなので、逸らしたいのを必死に堪える。というか、冗談に決まっているだろうと、何で本気にするのだと、目に力を込め見つめ返す。
すると、ロードもため息をつきつつも、話の続きに戻ってくれた。
「彼が、優秀そうなのは認めよう。でも、歳が六つも年上だし、それに……」
ロードは言葉を濁す。先程からそれを言ってもいいものか迷っているのだろう。しかし、ティアは遠慮することなく、それを言葉にする。
「歳なんて、私がもう少し大人になれば気にならない程度ですよ。それに、家柄も。下手に北の一族の中心じゃないほうが好都合です」
ティアが北の若者たちの経歴を見て気付いたこと。
それは彼らの北の一族での地位だ。良いとは言い難い地位の者が多かった。
はっきり言えば、低い。
シークスの中でも各々の一族によって、どこまでを一族の人間にするかは、判断基準が違う。
例えば、東の一族ファレントの場合は、判断基準が厳しい。分家は基本認めない上に、本家の人間であっても不適合だとされればファレントの姓を名乗ることは許されない。四族の中でも最も厳しいだろう。その為、東の一族の人間は極めて少ない。
逆に、北の一族セリアムは、分家も多く、四族の中で最も一族の人間が多い。そして、今回連れてこられたのは、分家も分家。もうこれ以上本家の血筋から離れるようなら、セリアムの姓を名乗れなくなるだろう家柄の者たち。そういう者たちは必然的に一族の中での地位も低くなる。
今回連れてこられたのは、そういった家柄の者が多かったのだ。

つまり、ロードは不釣合いだといいたいのだろう。
しかし、ティアにしてみれば好都合以外のなにものでもない。本家の息が強くかかった人間など御免だ。やり辛くて仕方がないだろうから。
（でも、ねぇ……？）
ティアは椅子に深く座り、考え込む。
（だからこそこの人選の意図が読めない。これだけ本家から離れた人間じゃあ、北の一族からうちの一族に与える影響力がなさ過ぎる。まるで婚約の意味さえないような）
この婚約の提案をしてきたのはジアムの方からだ。十年ほど前の【ある出来事】、ジアムが言うところの東の一族ばかりが得をする出来事を承諾してもらうために、引換え条件としての婚約だったはずだ。影響がないのなら、一体どういうつもりでこの婚約を提案したのか。何かしら、北の一族にとってのメリットがなければ引換え条件になどならないはずではないだろうか。
結局、深読みしてもわからないので、純粋に自分にとってプラスになる人物を選んだわけだが、だからといってこの人選が気にならないといえば嘘になる。
（あの人の考えが読めない。本当に分かりづらい人）
半ば諦め気味ではある。ジアム・ルド・セリアムという相手は本当に理解し難い。長い付き合いではあるが、昔からそうだった。
だがしかし、その長い付き合いだからこそ、ただひとつわかっていることがある。それは、彼が敵ではないということ。残念ながら、味方とも言い難いが。
確かに腹立たしいようなことは多々してくるが、彼が本気でティアを落としいれるようなことは決してしない。
それは、ティアが東の一族の人間、つまりはシークスの人間であるから。ジアムはシークス全体にとってマイナスになるようなことは絶対にしない。
（彼は決して四族同士で害するようなことはしない。人間性はとも

かく、シークスとしての彼の在り方に、疑問はない。尊敬に値するほどだわ）
ただ単純に人を苛めるのが好きなだけ。人が困る様を見て喜ぶ、真性のドＳなのだ。
何をどう気に入られたのか知らないが、特にティアを苛めることを彼は好んだ。ニヤニヤと笑うジアムの顔が頭をよぎる。あの楽しそうな顔。
（……ただの嫌がらせかもしれない）
本当にそうだったらどうしようと、げんなりした。
ジアムは害することはしないわけだが、私情はガンガン持ち込んでくる。
自分が楽しいから。
四族同士の誓約に、その感情を持ち込むほど気に入られているのだとしたら。そう思うと本当にぞっとした。有り得る辺りが、特にぞっとした。
（本当になんで、あれに気に入られたんだか）
彼と関わるとどっと疲れる。
頭を抱えたくなる。
勘弁して欲しい。
ただ、ジアムの前でそんな態度を見せれば、なお気に入られてしまいそうなので絶対に見せるものかと、心に決めている。
（まぁ、だから、敵意まではないのはわかるんだけど。ただ、素直に困ったりするのは、嫌なのよね。なんか悔しいから）
ここまで考え、諦めにも近い気持ちが強くなってきた。
今回の人選に関して、考えられる答えは二つ。
私への嫌がらせか。なにかしら北の一族にプラスになるものがあったのか。ただ、どちらかなのかは本当に分からない。もしかしたら、他の意図があるのかもしれない。
でも、ジアムの真意を図ることはできなかった。
ため息をつきながら、ティアは婚約者へと選んだ【運命の人】の

経歴書を見る。
（まぁ、気にはなるけど仕方ない。それに彼が手に入ったのは思わぬ幸運という事実に変わりない、か）
あまり期待していなかった婚約者。しかし、どういう僥倖か、選択肢にリト・クロム・セリアム。彼が入っていた。
（これから、私のために精一杯働いてもらわないとねぇ）
突然の出来事に戸惑っているであろう彼に会うために、彼女は席を立った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4499w/

青玉

2011年12月2日01時46分発行